

二番隊隊長は最強の自由人

褐色はいいよなあ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

二番隊の隊長は自由人だ。

仕事はしない、面倒は起こす、フラットどこかへ消える。

そんなダメ大人の死神。隊長の器として疑問を浮かべるような男。

しかし、それでもその男はただただ……強かった。

目次

プロローグ	1
お買い物	4
援護	9
お仕事	14
暗躍	20

プロローグ

「……今日も空が青い」

そんな誰に聞かせるでもないセリフが口から零れつつ、包装されたチョコがコーティングされたビスケットのお菓子を口に運ぶ。

バリボリと口の中に音が響きわたり喉を鳴らしながら胃に落とす。

「うん、美味しい」

人間の作るお菓子はなんと美味なことが。これを食えるというだけで人の世を守るに値する価値が大いにある。

そんな感慨深くうなづいていると、

「……見つけましたよ」

「見つけられちった」

背後からかかった女性の声。

足音も何も無く突然背後に現れた存在に驚くことなく、そちらに目を向けることなく手を振った。

「はあ、仕事を放り出して何してるんです。そろそろお願いしますよ……」

「苦労してるんだね。だからといってイライラするのは良くない。カルシウムを取りなさい」

「誰のせいですか……!」

こちらの言葉にイラつきを乗せた言葉が返ってきた。

はて、俺は何かしたか。

「誰……シゲちゃん?」

「あなたですよ!」

「っ!ひゃー、そんな声を荒らげんでも」

冗談交じりで言ったというのに耳元まで口を近づけて叫ばれた。おそらく鼓膜はないなった。換えの鼓膜に付け替えねば。

「さ、とりあえず戻りますよ。書類の方が溜まってます」

「……」

彼女の言葉に机に積み上げられた紙の山が思い浮かんだ。

溜まった仕事……ふむ、面倒が臭いというやつだ。

となれば、

「あ」

そんな短い声とともに彼女の後方を指さす。

「え？」

それに咄嗟に反応し顔を後ろへと向ける彼女。

……素直がすぎる。お兄ちゃんちよつと心配になるよ。

そんなことを思いつつ腰を上げ”瞬歩”を使いその場を離脱。

「何も無いじゃな——」

遠目から見ると顔を戻した彼女はそこにはもう俺がいないことを認識すると、膝を崩し拳を握りそれを地面に思いつき叩きつけていた。

真面目でいい子なんだけどああいうところはポンで可愛いよね。単純単純。

さて、今日は何をしようかな。

++++

——隊首会

護廷十三隊の隊長たちが一堂に集まり会議を設ける場。

そんな張りつめる空気。数人の欠席を出しながらも始まった会議。

その議題とは、

「——二番隊隊長、香釈かしゃかぶら鐮の手綱を握る良い案を思いついたものは？」

髭の長い老人の重々しい口調から放たれた議題は第三者から見ればズッコケものだった。

だがこの場に集まる隊長達にとってこれは死活問題。早急に解決せねばいけない事案だった。

「「「「……」」」」

だがしかし、誰も彼もが何も案が浮かばない。

あの男の今までの行動。それを思い返してみても、どう足掻いても止められないほどの自由さという乗り越えられない壁があるのだ。

男がした行動、それは、

十一番隊舎にて花火約1万本を放ち建物を半壊。

十二番隊舎にて薬品をごちゃ混ぜにして遊び建物爆破。

三番隊舎に忍び込み隊長の顔に落書き。

五番隊隊長の執務室に墨汁入り水風船を投げつけ嫌がらせ。

九番隊隊長と顔を合わせる度に喧嘩が始まる。

それら全てで出た負傷者が全て四番隊へ。

等々、大規模な損害から個人的な嫌がらせまで幅広く行う二番隊隊長。

ほかの隊長面々は頭を抱えていた。

「——ふむ、案は無しか……では」

髭の長い老人、総隊長がそう言葉を続けようとした時、

「し、失礼します！」

扉を開けて入ってくる一人の隊員。

「何用か？今は隊首会の——」

「存じてます！ただ！二番隊隊長、香沢隊長が！」

その言葉に何が起きたのか即座に察する隊長たち。

彼らは同時にその手で頭を抱えた。

お買い物

——二番隊隊長補佐兼隊長代理・碎蜂

この者を特例措置としてこの役職に付けることを認可する。

現隊長、香积镝が機能しなかった場合にこの者を隊長として扱う。

手にする一枚の紙。俺はそれをヒラヒラとたなびかせながら目を通していた。

二番隊のみに許された隊長代理の制度。

「……これもう碎蜂^{アイツ}が隊長でよくね？」

思わず出た言葉。誰しも彼しもが思っていること。

我ながらなぜ未だに隊長の任を下ろされていないのか謎で仕方がない。

そんなことを思いつつ、手にしていたその書類を引き出しの中へ。

その時、

「はあ…はあ…戻って…きて…たんですね…はあ…はあ…」

扉が勢いよく開け放たれそこに立っていたのは。

「おーおっおっおー、シャオちゃん」

シャオちゃんこと碎蜂^{さいふう}。我が隊長補佐兼隊長代理サマだ。

小柄で華奢な少女のような見た目、しかして、その実力は隊長でもおかしくないレベルのもの。

「シャオちゃん呼びはやめてください！まったく。それにしても珍しいですね。隊長が執務室に戻ってきていたとは……」

「うん？そりゃ戻るよー？…ここ俺の部屋だし」

「……っ。はあ…まあいいです。戻ってきたのならこのまま仕事しましょうか」

俺の言葉に若干のイラつきを感じつつそれを押えそう諭してくる。

でもゴメンな。

「いや、俺この後現世の方に買い出しだから」

「……は？」

「いやー、菓子も切れそうだしー。あっちの世界ってこつちとお金とか違うじゃん？それ取りに来たんよねー」

そんなことを言いつつ引き出しの中から黒の折り財布を取り出す。

中身は……バツチシ。さてと、おっ買い物♪おっ買い物♪

「いや、いやいやいやダメ！ダメですよ！今日は仕事です！ダメです！」

「嫌もダメもじゃないの。わがままも大概にだよ」

「どっちがですか!？」

さてと、ワーワー騒ぐシャオちゃんを他所に体を伸ばす。

筋肉を解しいつでも駆け出せるように。

「——そもそも無闇に現世の方には「そんじゃね、あとよろ」行かない……い……よう……に……」

走り出して直ぐに部屋から「たいちよおおお！」という叫びが聞こえてきた。わお、元気。その元気、仕事に活かして欲しいと思いました。

さて、義骸と地獄蝶を手に、いざ現世へ。

++++

あの人が隊長になってからどれだけ経ったのだろうか。

隊長、香車鎧が出ていった執務室にてそんなことを考える。

二番隊の前隊長がその身を忽然と消してから隊長の座へと着いたあの人。

その振る舞いは隊長とは程遠く、幾度となくその任を下ろす話も出ていた。

しかし、そこに毎度待ったを掛ける二番隊の私含めた”全隊員”。隊首会にて隊長代理で出る私とその意を伝え続け今のこの現状。

分かっている。傍から見てもあの人のどこにも隊長としての心構えがない。それでも断言する。あの人以上の隊長は考えられない、と。

十一番隊舎を花火で半壊。

あれは十一番隊隊長がしつこく二番隊の隊員に斬り合いを迫っているのを見兼ねた隊長が仕置きとばかりにやったことだし、十二番隊舎の件だってそう。二番隊隊員に対しての実験体への勧誘が執拗いと隊長が隊員に代わって嫌がらせしただけだ。

いつだってあの人はそう。

いつもふざけてるようで……いや、ふざけてるのだけど、でも誰かのために周りを気にせず思うままに行動する人。

それを間近で見ってきた二番隊ならそんな男の背中に憧れるのは普通でしょう。

いつもは人として最低でもやる時はやってくれる誰よりも頼りになる男。実際私も何度も助けられた。

「はあ……」

そんなことを考えつつため息を吐く。

そこで目に入ってきた隊長が先程まで座ってた椅子。

恐る恐ると座りつつ何度か座り直し位置を調整。

……隊長の温もりがまだ残ってた。

隊長はあのままがいい。でもやっぱり、

「もう少しちゃんとしてくれたら……かっこいいのに」

そんな呟きは執務室の天井へと消えていった。

++++

さて、

「やってきたぜ、現世」

早速お買い物へとレッツラゴー。

そんなことを思いつつも足は止めない。

車以上のスピードで人間の目には止まらない速度で駆け抜ける。

そうしてると見えてくるいつもの駄菓子屋。

ブレーキを掛けた店前へ。

そして、

「おばちゃん、いるー?」

店内へ声をかける。

すると数秒後、

「あら、お久しぶりね」

「そう?」

最後に来たのは……ひと月前くらいか。人間感覚だと長い方か。

「いつものでしょう? いくつ買ってた?」

「あるだけ頼むよ」

「うんうんちよつと待っててね」

そう言っつて奥に消えるおばちゃん。

その間に財布からお札を取っておく。

そうして待っていると対して時間も経たずに大きな紙袋を手に戻ってきたおばちゃん。

「はいこれね」

「サンキュサンキュ。つとこれでいい?」

と手にしていたお札。1万円札を出す。

すると途端に気まずそうな顔をするおばちゃん。

「あー、ごめんねえ。今お釣りがね……」

「……あー、マジで?」

釣りが無いから1万円での会計は無理となるほど。

「細かいのとかは無いかい?」

「んー、あいにく大っきいのしかねーな」

これはどうするか。

このままだと買っつていくことが出来ない。となるとどこかで崩しつていくか。

近くにコンビニはあったか?

「ちよいおばちゃん。俺、近くのコンビニで崩してくるわ。待っつてくれ」

「ん? そうかい。それは助かるよ。気を付けていっつておいで」
そんな言葉を耳にその場を後にする。

瞬歩を使いつつコンビニへ。

「……ん?」

とそこでとある気配を感じる。

これは、

「虚か」^{ホロウ}

せつかくだ。ついでに潰していこうか。

腰に差した木刀の柄を掴み、そして、

「……………これだよ」

さて、駆除も済んだしさっさとコンビニコンビニ。

そうして俺はさらに速度を上げ、進んで行った。

++

唐突だった。

目の前の先程まで戦っていた虚がどこから飛んできたか、赤黒紫の斬撃に一刀両断された。

一撃で脚と胴が泣き別れ。

その光景に呆然と立つ俺の横で”ルキア”はブツブツと何かを呟いていた。

「この攻撃は……………いや、まさか……………いや、でも——」

目を見開きいかにも驚いたような表情。

コイツのこんな表情は初めて見る。狼狽したような焦りと恐怖と困惑。それらが混ざったような顔。

「何がどうなってるんだよ……………」

たまらず出た言葉はルキアにも届かず澄み渡る青空へと消えた。

援護

「いやー、やっぱこっちの世界はいいなあ」

俺はいつものお菓子、チョコがコーティングされたビスケット：ブラックサンダーがたんまり入った木のぎるを抱え、現世の河川敷を散歩していた。

「空気がうめーわ、景色は良いわ、息抜きにはちようどいい場所だなあ」

のびのびした足取りのまま体を伸ばす。

ソウルソサエティ尸魂界から出てきてもう3日。シャオちゃんに仕事押し付けてきたけどまあ大丈夫でしょう。

「二応、虚は対処してるし仕事してる仕事してる。偉いなー俺」
包装を開け口の中に菓子を放り込む。

うん、うまいうまい。

「つ……と、またか」

ここから離れたところ……虚の気配。まだ出現はしきつてないが直にかなりの数とその姿を現すことだろう。

近くには……死神が1人、2人、3人……これは4人目に入るのかな？力が弱まりすぎてるやつが1人。どうしたんだろ。

後は……滅却師クインシーか？珍しいな。

と、後は……よく分らんやつが2人いる？死神じゃないし滅却師でもないし……何だこの2人。まだ力に覚醒してないようだけど。

離れすぎててよく分からん。もうちよい近づけば誰が誰か分かるだろうけど、

「ま、これだけいるなら……なんとかなるっしょー！」

ヤバそうならこっから援護すればいいし、のんびりと行きましょ。

そんなことを思いつつ河原の少し坂になつて野原に寝そべり菓子を口へと運ぶ。

「のどかだなあ……」

そんなことを呟きながら瞼を閉じた。

「……………んあー、寝てたか」

どれだけの時間が過ぎたか。どうやら寝てしまったらしい。

空を見ても太陽の位置がさほど変わってないことからそこまで時間は経ってないだろうとは思うが、

「さて、あちらさんは……………つと、こいつあちと不味いか」

死んだ奴はまだ無し。だが、出てきてもおかしくない。

致し方なし。

「手伝うかあー」

義魂丸をひとつ取り出し口に放り込む。

直後に義骸から抜け出す体。

「そこで寝てていいから」

「分かりました」

俺の言葉に寝そべる義骸。

とりあえずこれで周りからの目は気にならなくなる。

腰の木刀を抜き取り河川敷を下る。

開けた場所、そこに立ち足元を数回踏みならし踏ん張りが効きやすいように。

「よし、やるか」

その言葉と共に木刀を振るった。

直後木刀から放たれた10の赤黒紫の斬撃。

「……………数が多いな」

一般の隊員じゃなくて副隊長さん方が出てもいいレベルの案件ちやいますか、これ。

どんどん増える増える。斬った手応えは感じるが倒すのとはほぼ同スピードで産まれてくる。減りがない。

「はてさてどうするか。……………こんななら向かうべきか」

いつその事ひと塊になつてくれるなら一撃で終わらせられるんだ

がな。

滅却師くんも死神くん達も頑張ってくれてるみたいだけど……お？よく分からん2人も力が覚醒してるな？戦つとる。

……ほう、倒せたのか。そいつは重畳。後で顔を拝んでおきたいね。

それにしてもどうするかこの状況。

いかんせん距離が離れすぎてる。その場にいるならどうということもないがここまで離れると場所の細かい特定から狙い撃ちまで神経使うから一度に十体くらいしかやれんし。

とそんなことを思っていた時、

「おっ？」

虚が移動してるのを確認。

1箇所が集まるように、集合場所に向かう友達のように、1箇所に集まりまとまり、

「……大虚^{メノス}かあ」

出てきてしまいましたかメノス・グランデ通称メノス。

虚の上位種でこいつが出てきた場合確実に隊長クラスの死神が欲しいものになるんだが、

「……殺り合おうとしてるのか」

それなら横槍刺すのは無粋つてものだ。

ひとまずは傍観といこう。……別にサボりたいわけじゃないけどね？

そうやって空を流れる白雲を眺めていると、途端に感じる異常な霊圧。

「……やっぱ」

どうやらその霊圧の主がメノスに攻撃をぶち込んだようだ。

「凄いね。4、5席にいてもいいレベルだ」

そう思うのはお世辞じゃない。事実。

だが大虚は倒しきれてはない。

しようがなし。

「トドメは俺が刺そうか」

屈伸をひとつ、木刀を構え、

「うーん、この距離なら上げとくか。大虚だし」

木刀に語りかけるように呟いた。

「進め、『天下』」

直後木刀を中心に巻き上がる赤黒い紫の斬撃の嵐。

その嵐を収縮、木刀の中へと封じ込めるようにまとめ、

「よっこい……せ。っと」

空に向かって振り下ろした。

「ちゃんと当たるのよー」

そんなつぶやきと共に斬撃は空を駆けて行った。

十十

「一護がメノスを両断してしまっておった……！」

たまらずこぼれた言葉。

私が力を与えた元人間のあの男があのメノスに傷を与えた。

驚くなどという方が無理だろう。

そんな半ば放心状態になっていると目の前の大虚が空間を裂き帰ろうとしていた。

その瞬間だった。

突如として飛来したひとつの巨大な斬撃。

赤く、黒く、そして紫の独特な色をしたその斬撃は目の前の大虚を空間ごと袈裟斬りに叩き斬った。

「!!?!」

あまりの突然の出来事にその場の誰もが驚きを踵にした。

大虚はそのまま空間の裂け目に倒れ込むようにして消えていった。

最近見た一撃。やはり見て思うのは、この一撃はあの隊長で間違いないだろうということ。

「またこの攻撃……どこの誰がどつから打ってきてんだよ」

一護が引きつった笑みを浮かべ斬撃の跡を見ていた。

確かに、あの隊長はどこにいるのか。近くにはいない。

いや、もしかしたらいるのかもしれない。霊圧や気配を消すのが上手いから単に気づかないだけの可能性。

それが、

「は、はは。マジですか。あの人今現世こっちにいるんすね」

浦原も冷や汗を流し空を眺めていた。

「一体どこから…」

「……まあ、角度、威力から見てそうでスね……隣町??からでしょうね」

「と、隣町からだ!?」

バカな！そんなことが……ない、と言いきれない。

隣町からこっちの虚の気配を完璧に探り寸分違わずに斬撃を飛ばす。

並の芸当では無い。

「……会いたいような、会いたくないような、複雑な気持ちでスね」

考え込む私の耳に浦原のそんな声が入ってきた。

お仕事

「たでーまたでーま。みんなのアイドル、鎬くんただいま帰還」
そんなことを喋りながらドアを開ける。

約5日ぶりに見る我が執務室。

現世での休暇を終え、続いて尸魂界での休暇に切り替えようと戻ってきたはいいが、その執務室。俺の椅子に腰かけて書類の山に埋もれている目の下に隈ができた1人の少女。

「お、シャオちゃんおつおつおー」

「……隊長」

死にそうな声でこちらを見る碎蜂。

「どうしたどうした。そんな5日近く寝ずに仕事してた社畜みたいな顔してるぞ?」

「まさにその通りですよ」

なんと、それは大変だ。

「さ、今すぐ寝なさい。そしてお風呂に入り、それからまた仕事をしなさい」

「……あ、隊長がやってくれるってことは」

「俺この後行くところあるから」

「……そですか」

そう言いながら立ち上がるシャオちゃん。

体に乗っかっていた書類が地面に落ちる音が耳に入って、その次の瞬間、

「フッ……!」

「……危ねー」

顔に目掛けて飛んでくる足。

頭を傾けかわしつつその足を捕もうと――

「シッ!」

「……」

空中で身を振り蹴り出した足を引き逆側から顎を狙った軌道の蹴り。

それを腕で受け止めつつ、押し返した。

「クツ…」

「おいおいどした？思春期？」

「……う、う」

俺の言葉にプルプルと体を揺らしながら、そして、

「うるさーいッ!!」

大声でそう叫んだシャオちゃん。

俺は両耳に指を突っ込んだ。

「5日ですよ!? 5日!! その間、私がずっと仕事してましたよ! でもそれはいいんです! まだね!? いつものことですから! 慣れてます! でも! この仕事量! 見てくださいこれ!」

そう言つて指さす場所は書類の山と海。白い紙がすごく散乱している。汚いです。片付けましょう。

「この書類なにか分かります!?!」

「……シャオちゃんの買い物の請求書とか? あ、また新しい下着とか買ったで——」

「あなたの破壊した損害請求です!!」

俺の言葉に食い気味で赤い顔でそう叫んだ。

とりあえずこれは新しい下着買ってますね。

「あとセクハラです!」

「はは、何を言う早見優。俺たちのいつもの会話じゃん」

「今のが日常的な会話になってることをそろそろおかしいと思つてく
ださい!」

おかしいのだろうか。いいや、おかしくない。

それにしても、

「だいぶ溜まってんねー」

「溜まってますよ! 毎度隊長が起こす騒ぎが原因で!」

「カツカツカッ!」

「笑い事じゃないですよ!?!」

そんなシャオちゃんの怒号を笑い飛ばしながら地面に散らばる紙を拾い集める。

修理費たけく。ちよくんのポケットから出してもらお。

「兎にも角にもシャオちゃん、あんた目の隈酷いよ。女の子がそんな顔するのは宜しくない。てなワケでそのソファで横になりなさい」「え?……いやいや、私が寝たら今この仕事は「いいから」……!」

「寝る。分かった?」

「は、はい」

俺の言葉にシャオちゃんがおずおずとソファへと向かっていった。……こつちをチラチラ見ながら。

「いいから早く寝る」

「は、はい!」

そうしてソファへと座ったシャオちゃんは、座った体勢のまま戸惑いっつもそのまぶたを閉じた。

さて、

「やりますかね」

＋＋＋

机に向かっておよそ1時間。

当初の頃に比べ部屋中に散りばめられていた書類の数はかなり減り、大分室内はスッキリとしてきていた。

そんな時、部屋の入口そこに向かって誰かが来てるのを感じる。

「……」

この気配は……あいつか。

気配の主。そいつが扉の前に立ちドアをノックしようと、

「入っていいよ」

する前に声をかける。

あいつのドアのノック音はうるさいからな。寝てるシャオちゃん起きてしまうようなことはやめて欲しい。

「し、失礼します……」

そう言っただアを開けて入ってくる巨大な凶体の男。

「よっす、ちよくんおつおつおー。なんか用?」

ちよくん。おおまえだまれちよ大前田希千代。

二番隊副隊長の男。実力は隊長格には程遠いお金が取り柄の副隊

長だ。

「か、帰ってきてたんすか」

「……何よ？帰ってきて欲しくなかった？」

「え？あーいやそんなことはないです！はい！」

「声がデカイ。シャオちゃん起きちやうでしょ」

「え？」

目線と顎でシャオちゃんの寝るソファを示す。

そちらに目を向けたちよくんは慌ててその両手で口を塞いでいた。

ちなみに座った体勢で眠っていたが俺が横たわらせました。座って寝ると起きた時腰と首痛くしちやうからね。

「それでどした」

「え？あー、その例の隊員の話で……」

「例の隊員？」

「あの十三番隊の朽木ルキアの件で……」

「ルキアちゃん？」

ルキアちゃん、十三番隊の隊員で六番隊の朽木白哉、通称びやくやんの義理の妹。

性格は至って真面目で可愛い物好きのいい子。

そんなルキアちゃんが何かしたんか？

「……あ、隊長はやっぱり聞いてない感じですか？」

「なんかあったの？」

「へい、現世の方に出ていったきりで行方不明になったと……」

へー、あのルキアちゃんが。

……。

「そんでうちの隊に話が来て隠密機動部隊が調査した結果、現世の方で義骸を発見。さらには人間に死神の力を譲渡していたと言うこと
でして……」

「……なるへそ。中央四十六室^えにはもう報告したん？」

「へい」

マジかあ。もうあのじじい共の耳に入ったか。

「処遇はどうなる感じ？」

「まだ正式には……でも極刑になる方向に話は進んでるみたいっす」
「……うっそー。まじっ？」

ルキアちゃんからの話もなしに極刑かよ。
おかしいにも程がある。

……やっぱあいつが絡んでるのかな。後で調べよう。

「おっけー、とりあえず了解した」
「うっす」

「あとちよくんこれ」

首だけ曲げて頭を下げるちよくんに差し出す書類。

おずおずと手を出してそれを受け取るちよくんを見ながら言葉を続けた。

「隊舎のもろくなってきたる箇所のリスト。お前の方で修理頼むよ」

「あ、了解っす。……あ、そっちは」

と言つてちよくんが指さした方向。俺の後ろに並ぶ紙の山。

「あーこれ？これは俺がぶっ壊した損害請求のやつ。これは俺の方で出すからいいよ」

「あ、いやでも俺が出します——」

「いいよ。これは俺が壊した。なら俺のポケットから出す」

「あ、わ、分かりました」

そう言つてペコペコと頭を下げながら後ずさりするちよくん。

「そんじゃ、俺は失礼しますね」

「あいよー」

そうしてドアを開け部屋を出ていこうとする。

が、足を止めちよくんは顔だけこちらを向けて口を開いた。

「……隊長。やっぱりもつと今みたいな隊長の姿をみんなに見せた方がいいと俺思うんすよ。影での隊長の働きをもつと表に出して……」

二番隊は隊長のごと信頼できてますけど他の隊は……」

「……んじやいいじゃん」

「えっ？」

「俺の隊のヤツらが信用してくれるなら別に問題は無いさ。っーわけ
でこれからもよろしく副隊長」

「……うっす」

納得はしてなさそうな顔。

それでも返事をひとつ残して言ってちよくんはその場を後にした。

暗躍

尸魂界に旅禍が侵入した。

唐突だつて？ 災難つてのはね、唐突に襲ってくるのが世の常さ。珍しく仕事をしていた日から約10日。恐らく旅禍の正体は今に囚われの身になってるルキアちゃんの現世の友人たちだろう。

助けに来たか……なかなかに眩い青春じゃないか。無謀、無鉄砲、しかしてその勇氣には感心する。

がむしやらの感情は時に強者をも凌ぐ力を一時的に得られることがある。

「……旅禍の子たちには頑張ってもらいたいもんだ」

まだ見ぬ侵入者に期待を寄せながら執務室から空を見ていた。

++++

ぎんちゃん（市丸ギン）が旅禍に接触した。

白道門から侵入してこようとしていた旅禍を撃退。しかし、その命まで取らなかつたということとでただいま隊長達は一番隊舎にて隊首会が行われていた。

俺？ 俺は行ってませんことよ？ シャオちゃんに行ってもらってる。

俺には隊首会に”行く暇がない”。そんなのに顔出してる暇があるなら行動だ。

「失礼、お邪魔」

そう言つて外から飛乗る窓の縁。

その部屋にいたのは、

「「「え？」」」

各隊、副隊長たち。

「「「か、香釈隊長!?!」」」

「よ」

驚く彼らに手を挙げ挨拶をする。

挨拶は大事。みんなもちゃんとやろうね。

「香釈隊長が何故ここに?。」

「んー?……野暮用?。」

赤髪を後ろでまとめたレンレン（阿散井恋次）が一步前に出てきた。このレンレンとびやくやん（朽木白哉）が今や囚われの身になってるルキアちゃんを連れ戻したのだ。お疲れ様です。

「や、野暮用ですか…？」

「そ、野暮用野暮用」

こんだだけ野暮用という言葉が出てくると……アレだアレ、あー、あのあれよ。首元まで出てる。あの一、ゲレンデだかタルトだかが崩壊しちゃうあれね。うん、あれ。

「どのような野暮用でしょうかね？……あの香積隊長が」

「お、てっちゃんよっす。……いるのはレンレン、桃ちゃん、てっちゃんに……おーらんちゃん！」

そう言つて手を上げる。

視線の先には金髪に死覇装をだけさせた色っぽい女死神の松本乱菊。

「相も変わらずなかなかのもんをお持ちのようで……」

「……相変わらずセクハラですか」

「てか前より服小さくなつ……いや、これはまたπがデカく――」

そこまで言うのと飛んできたのは拳。

それをひらりと躲しつっらんちゃんの方に向き直った。

「暴力、イクナイ」

「正当防衛ですから問題ないです」

「……なるほど」

確かに変態（俺）から身を守るためには暴力を使うしかない。じゃあしようがないね。

「あ、あの一」

「ん？」

「ところで野暮用の方は……」

馬鹿なことをしていたら下の方から声がかかった。

そちらに目を向けるとそこに居たのは桃ちゃん（雛森桃）。

「お、今日も愛らしいな。そんな君には飴ちゃんをあげよう」

「へ？……あ、ありがとうございます」

俺のよく舐めるチュッパチャプス。美味しいよね。

おずおずと受け取る桃ちゃん。可愛い。可愛すぎてお兄ちゃんになっちやう(?)。

「さて、野暮用ということなのだけれども……皆の衆」

そう声をかけると途端にピリついた空気が張りつめる。

真剣な眼差しで見つめてくる副隊長たち。

そんな彼らを目にしながら俺は懐に手を突っ込み、そして、

「お茶しようか」

そう言つてティーカップとポッドを取り出した。

「……今どこから取り出しました？」

レンレンの言葉が聞こえた。

「――落ち着くねー」

お茶会を初めて十数分。カップ内の紅茶を飲みながらしみじみと呟いた。

「……こんな呑気でいいんでしょうか？」

「ええのええの。あんま気にすんなー」

らんちゃんの言葉に手を振りながら答える。

みんなは気を張りすぎだ。ちつとは肩の力を抜かせねば。

「ところで」

「ん?」

「香釈隊長は”こんなことのため”にここへ来なされたわけですかい?」

「……」

てっちゃん（射場鉄左衛門）の言葉。

はてさて、こいつは参った。相も変わらず鋭いグラサンくんだ。

その言葉を皮切りに睨みを効かせた視線が突き刺さる。

「……」

「……カカツ、鋭い。さすがだ、てっちゃん」

「……どうも」

「んじやまあ手っ取り早く行こうか」

そう一言こぼし残る紅茶を一気に喉へと流し込む。

息を吐き一拍置き、俺は口を開いた。

「単刀直入な?……裏切りモンがいる」

「——?!」

「誰かの仮定は出来てる。数人までに絞れた。……が、それを確定する要素が今のところはない」

「……裏切り者、とは?」

……そつか。そつかから説明か。

確かにその説明無しに進められる話違うか。

「約100年前。正確な数字はよく覚えとらん。そんな時に8人の隊長格、及びに鬼道衆のトップ2が居なくなることがありました。その事件、その元凶、それは消えた隊長格8人の中の一人が起こした事件と言われ続けてます。……さてこれは事実でしょうか?」

「……え?」

「答えを教えよう。黒幕がいる」

その言葉に嫌に静まる室内。

「騙され続けてはや100年近く。この間、俺はずっと正体と目的をコソコソ探ってきてたわけなんだが、何となく全容を掴めてきたわけだ」

「いや、待ってください。それが事実だとしてじゃあ一体誰が……」

「分かん?」

レンレンの言葉にこめかみ部分をコツコツ叩きながらおどける。

そして、彼らの方を指さし、

「隊長の誰かだ」

「……っ」

「てなわけで副隊長であるお前さんらに報告しとこうってな」

「……もし間違ってたら、大問題ですよ?」

「間違つてないから……話してるんだけどなー？」

隊首会に隊長が全員出てる。副隊長が一同に集まる。こんなタイミングを逃しちやいつ伝えられるか分からない。

あくまで”あの男”に不審に思われなような流れ。タイミング。副隊長が集まるこの場所にいつものようにからかいに来た二番隊長という自然体に見せる。これ以上の場はない。

今話して、信用を得て、少しでも警戒を強めておきたい。牽制にしなければそれがそれでもだいぶマシだ。

後は最後の確認さえ出来れば、それでいい。

この100年、一人でやってきてた事だったこともあつて時間はかかったがもうすぐで全部解ける。それまでの時間を稼いでくれ。

「てなわけだ。変に詮索もしなくていい。ただ、いざと言う時に対処できるように準備をしといてくれってことだ。あんだすたん？」

俺の言葉に面食らう彼ら。

しかし、

「分かりました」

真っ先に頷いてくれた者。

その豊満なバストに手を当てながら目を真っ直ぐこちらに向けてきたらんちゃん。

「変態、怠惰、阿呆の三拍子揃った香釈隊長ですが、あなたの言葉は信頼できます。香釈隊長がそういう指示をするのならば、副隊長として職務は果たします」

「……素直に喜べない俺がいるー」

それでもありがたいけどね？うん。ありがたいよ？

「分かりやした。ワシも微力ながら手伝わせていただきます」

「……頭には入れておきます」

てつちゃんもレンレンも頷いてくれた。

あとは、

「桃ちゃん」

「……っ。……あ、あの藍染隊長は違うと思います、よね？」

桃ちゃんはそうくんを心酔してるからなあ。疑いたくないと。

……、

「そうだな。桃ちゃんは他の隊の隊長に気を向けていてくれ」

「は、はい」

さて、とりあえずこれでひとまずはいいとしよう。

俺の判断が吉と出るか凶と出るか。

そんな時だった。

「っー」

この霊圧の高まり。

いつぞやに現世で感じた莫大の霊力。

まさかあの時のメノスに攻撃ぶち込んだやつか？

「香釈隊長？」

誰かの声が耳に入った時、

——カンカンカンカン

鳴り響く警鐘。

そして、

『緊急警報!!緊急警報!!滞霊廷内に侵入者有り!!各隊は速やかに守備配置についてください!!!』

侵入者?そんなのは感じなかったけどな。

なんだ?

そんなことを思ってる間に副隊長は速やかに準備を済ませ、慌てる気持ちを抑えこみ部屋を出ようとしていた。

と、その前に、

「らんちゃんはこっち」

「へ?」

瞬歩を使いらんちゃんを捕まえつつ離脱。

廊下を曲がったところですのですぐにおろし口を抑えた。

「っー!」

「しー、ちよいと個人的に頼み事があってさ。おーけー?」

「……………」

手で丸を作り聞くとすぐに大人しくなる。

そのまま耳に口を近づけ端的に言葉を発した。

「桃ちゃんど……あとツルくんの面倒頼む」

「……あ」

「聞きたいことはあるだろうけどこれ以上2人きりが続くど怪しまれる。……どこにいてどこから見てるのか分からんからな。とりあえずよろしく」

そう言っでらんちゃんの返事を待たずに俺は走り出した。

この騒ぎ、これに乗じて俺も用をすまそう。